

# 生まれてくる赤ちゃんを

## ワクチンのない髄膜炎から守るために

細菌性髄膜炎は新生児から大人まで、誰もがかかってもおかしくない脳の周りの髄膜にまで細菌が侵入して引き起こされる、いのちにかかわる感染症です。



### 月齢

新生児期～生後3カ月くらいまで

GBS (B群溶血性レンサ球菌)

リステリア菌・大腸菌

などの髄膜炎に注意が必要です。

### 感染ルート・分類

分娩前や分娩時に感染…早発型(生後1週間以内)

分娩後に感染…遅発型(生後1週間～3か月)

### 症状

発熱 無呼吸 呼吸不全 嘔吐

おなかの張り けいれん 意識障害など

### 原因菌と注意点

#### ●GBS (B群溶血性レンサ球菌)

普段は膣や肛門の周りなどにおいて、害を与えることはほとんどありません。

妊婦さんの10～30%から検出されるポピュラーな菌です。

早発型には出産時に妊娠後期に培養検査を行い、菌が検出された場合は出産時に抗菌薬を投与して、赤ちゃんへの感染リスクを軽減します。

このためにも妊婦検診や妊娠33～37週頃の検査は必ず適切に受けましょう。

また遅発型の感染はその兆候に気付くことが重要ですので、日々の赤ちゃんの様子に注意が必要です。

新生児期の発熱やけいれん、意識の低下等には特に気を付けましょう。

#### ●リステリア菌

食品から検出されることの多い菌です。

妊娠中はリステリア菌に感染しやすくなり、感染してしまうと胎児にも影響がでます。

生の肉や魚、加熱殺菌されていないナチュラルチーズ、生ハム、スモークサーモンなどを避けましょう。

また冷たい環境や10%以上の塩分にも耐性があるので注意が必要です。

#### ●大腸菌

消化管内に常在する菌です。

尿路感染症や敗血症を起こすこともあり、血液に侵入すると髄液へ移行し髄膜炎を引き起こしてしまうことがあります。

日常にありふれている菌ですので、感染対策の基本手洗いや消毒などを励行しましょう。

### 予防

残念ながらこれらの菌にはまだ有効なワクチンがありません。

妊娠中の食生活や感染予防対策、検診や検査はきちんと受ける、そして感染の兆候をすばやくキャッチすることが、行動が赤ちゃんのいのちを守ることにつながります。それには、このような情報を知っておくことが非常に大切です。知ることで大切ないのちを守りましょう！

